

# 作文の成績53点だった川端康成少年が、

## 美の視点を獲得するまで

宮崎尚子

はじめに

平成二十七年一月六日、「山陰中央新報」の文化面に掲載された拙稿を紹介する。注釈は今回新たに加えた物である。

【執筆者】

宮崎尚子（しょうけい）  
尚綱大学文化言語学部助教、熊本市在住

【記事本文】

【主見出し】

川端康成と松江出身「倉崎仁一郎」

【袖見出し】

〜作文の成績53点の文学少年が、美の視点を獲得するまで〜

【カット見出し】

雑誌に初掲載作品の主題 恩師の葬儀 琴線触れる

川端康成が日本人初のノーベル文学賞を受賞したのは昭和43年である。その川端が「倉崎先生ほど私に感銘の深い教師は一人もなく、倉崎先生に対するほど私がよい生徒であったことは一度もない。」と絶賛した中学校時代の恩師「倉崎仁一郎」は、明治元年に松江市北堀町の倉崎礼助（3）山焼元祖・倉崎権兵衛の子孫）の次男として生まれた。松江<sup>4</sup>中学校を卒業した後は島根県や佐賀県の中学校教師を経て、明治28年に大阪府第四尋常中学校（後の茨木中学校）の加藤逢吉校長に招聘<sup>5</sup>され、大正6年に亡くなるま

で英語と歴史の教師として勤務した。

「生徒の肩に柩ひつぎをのせて」(「団欒」<sup>6</sup>大正6年)は川端の文章が雑誌掲載された最初のもので、恩師の葬式と通夜の様子を書いている。5年間受け持たれた恩師の死を嘆いた生徒たちは、その柩を全員で担ぐ事を決めた。この「世にも美しい葬列」が作品の主題である。その後同じ内容で「倉木先生の葬式」(「キング」<sup>7</sup>昭和2年)、「師の柩を肩に」(「東光少年」<sup>8</sup>昭和24年)と作品化されている。

「生徒の肩に柩をのせて」の発見に伴い、実は仁一郎が川端文学の美と深くかわる人物である事が分かってきた。仁一郎は上級学校より引き抜きの話もあったが、生徒達の嘆願書があった為にそれを取りやめた。その生徒達こそ柩を担いだ川端たちであり、前代未聞の生徒葬の美談は人々の心の琴線に触れた。この時に川端は美の視点を獲得する。

与謝野晶子等が名を連ねる「団欒」に、無名の中学生が載ったのは異例の事であった。主宰の石丸梧平はかつて茨木中学校に在籍しており、その時の友人・満井成吉が川端の文章を紹介した。満井は茨木

中学校で国語教師と寄宿舎舎監をしていた。「梅檀せんたんは双葉より芳し」というが、この時の川端の作文の成績は53点と低く、ほぼ最下位であった。満井によると「文章は抜群にうまかったが、内容が女々しかった」という。そんな作文が巻頭に写真付きで披露ばってきされたのは、内容の美しさを備えていたのもさる事ながら、茨木中学校の同窓生であったという要素も看過できない。

川端12の日記には、仁一郎が授業中に川端を褒めた様子や度々書かれている。仁一郎に対する尊敬とあこがれから英語の成績は抜群で、後に東京帝国大学英文学科に進んでいる。

三つの作品のうち、「倉木先生の葬式」だけ「先生の奥さん」が早世している。つまり「先生の小さいお嬢さん」が孤児である事を意味する。大正7年の川端の日記に、2人のお嬢さんに関して「結婚するのいずに何れを選ぼうと思案したり」と言及している箇所がある。大正9年には仁一郎の妻・寿恵(長谷川春水の三女)も亡くなっている。この時の2人の女兒はかつての川端の境遇と同じ「孤児」である。川

端の孤児をモチーフにした作品の大半がこの昭和2年までに書かれている事は、倉崎家の悲劇と無関係ではあるまい。

仁一郎の名は『西田千太郎日記』に十数回登場する。親族には小泉八雲と交流があったと伝わっている。川端が仁一郎の中に見た日本の美は、かつて小泉八雲がほれ込んだ松江の心でもあった。

尚、仁一郎に関する茨木市での資料は久敬会（茨木高等学校同窓会）で、松江市での情報のほとんどは、双松会（松江北高等学校同窓会）の押田良樹氏と石倉昭子氏の全面的な協力で明らかになった。12月の近畿双松会の総会で、両校の奇跡的交流が実現した。松江北高等学校の資料は火災で焼失したが、昔ながらの人と人とのつながりという宝は残っていた。

## 【カット】



倉崎仁一郎（川端康成の恩師）と四女敏子



茨木中学校5年生の川端康成（クラス写真から）  
写真はいずれも加藤逢吉校長寄贈のアルバムより（大阪府立茨木高等学校所蔵）

〔山陰中央新報〕平成二十七年一月六日文化面より  
抜粋）

## 【注釈】

- 1 川端康成…大阪府大阪市此花町生れ。(明治32年6月14日―昭和47年4月16日)日本の小説家(新感覚派)。両親の死に伴い、祖父母に引き取られて三島郡豊川村に移る。豊川尋常高等小学校、大阪府立茨木中学校、第一高等学校を経て、東京帝国大学文学部英文学科に入学。『伊豆の踊子』『雪国』などの作品がある。昭和43年に日本人初のノーベル文学賞を受賞する。茨木中学校の在籍時期は明治45年4月から大正6年3月に卒業するまでである。
- 2 倉崎仁一郎…島根県松江市北堀町生れ。(明治元年2月1日―大正6年1月29日)旧制中学校の英語教諭。島根県立松江中学校を卒業した後、島根県や佐賀県の中学校教諭を経て、明治28年に大阪府第四尋常中学校(後の茨木中学校)に招聘される。初代校長加藤逢吉は、松江中学校での恩師であった。兄金之助は日本で最初に小泉八雲の文章を教材として使用した英語教師(松江中学校教諭)である。
- 3 楽山焼…松江藩の御用窯。萩の陶工倉崎権兵衛を祖としている。古くは「御立山焼」「御山焼」であり、明治以降「楽山焼」と言われる。
- 4 松江中学校…明治9年に創設された伝習校の変則中学校を前身とした旧制の中学校。ラフカディオ・ハーン(後の小泉八雲)を招聘したことで知られる。現在の島根県立松江北高等学校の前身。
- 5 茨木中学校…明治28年に開校した大阪府第四尋常中学校を前身とした旧制中学校。川端康成、大宅壮一などの卒業生を輩出している。現在の大阪府立茨木高等学校の前身。
- 6 「団欒」…石丸梧平主宰の家庭雑誌。創刊は大正4年の6月1日で、廃刊時期は不明である。大正13年6月1日に創刊した雑誌「人生創造」の前身と思われる雑誌である。
- 7 「キング」…大日本雄辯會講談社(現・講談社)が発行した大衆娯楽雑誌である。創刊は大正13年11月で、廃刊は昭和32年である。
- 8 「東光少年」…東光出版社が発刊した娯楽少年雑誌。創刊は23年12月で、廃刊は昭和26年3月である。

9 与謝野晶子…堺県和泉国第一大区甲斐町生まれ。

(明治11年12月7日―昭和17年5月29日) 浪漫派の歌人、作家、思想家。雑誌「団欒」には短歌の他、評論等を投稿している。

田神社の名誉宮司。

10 石丸梧平…大阪府豊能郡熊野田村生れ。(明治19

年4月5日―昭和44年4月8日) 小説家、評論家、宗教家。大阪府立茨木中学校を経て(健康上の理由で退学)、早稲田大学を卒業している。号は梅外。雑誌「団欒」「人生創造」の主宰であり、「船場のぼんち」「受難の親鸞」の著者。

12 川端の日記…当時の大阪府立茨木中学校では毎日日記を書くことを義務付けられていた。(生徒日誌)『川端康成全集』には当用日記として中学校時代のものが一部残っている。(大正五年一月十五日の日記には次のように書かれている。「晴曇／三時

11 満井成吉…大阪府千里村佐井寺生まれ。(明治15

年11月22日―昭和43年7月) 茨木中学校の国語教師であり寄宿舎舎監であった。当時川端康成は寄宿舎の室長であった。石丸梧平に「生徒の肩に柩をのせて」「団欒」大正6年3月)を紹介した人物。満井成吉は山脇家に生まれるが、茨木中学校

間目給仕が英語共通試験の紙を持つてくる この前二学期は英語共通試験は欠席したので後から倉崎先生に君がゐたら乙組の平均点を増してくれるのだつたと云はれ又信用も先生にはあついで早くも胸がおどる 試験紙が分配される 先生『今日のは易いから川端位は満点をとるだらう』と言はれて増々胸がおどる」とある。)

13 2人のお嬢さん…仁一郎の三女道子(明治35年12月13日生れ)と四女敏子(明治42年10月2日生れ)のこと。

四年生の時に親戚の満井家に養子に行き、卒業と同時に宮脇家に養子に行く。その後満井姓に戻る。川端康成の日記には「山脇成吉」として登場する。大正十四年より神職生活に入り、昭和43年より長

14 『西田千太郎日記』…松江中学校教頭であった西田千太郎の日記のこと。千太郎の死後、次男敬三の浄書によって出版される。西田千太郎は島根県意宇郡雑賀町生れ。(文久2年9月18日―明治30年

3月15日)『西田千太郎日記』には小泉八雲との交流が詳細に記録されており、小泉八雲研究には欠かせない資料として知られている。倉崎仁一郎とは松江中学校の同窓で、日記にも十数回登場する。

15 小泉八雲・ラフカディオ・ハーン。ギリシヤ生れ。(嘉永3年6月27日―明治37年9月26年)新聞記者、紀行文作家、小説家、日本研究者、日本民族学者、大学講師。明治23年8月30日に松江に到着する。小泉八雲の旧居は北堀町の根岸家であり、仁一郎の実家と同じ町内である。